

【翻 訳】

日本に初めて来たスウェーデン人 フレデリック・コイエットの人生（3） ——（原作）グンナル・ムレーン——

延 岡 繁*

第6章 台湾総督フレデリック・コイエット

フレデリック・コイエットが2度目の日本（長崎）商館長を終えてバタヴィアに戻って来た時、彼の株は最高の高値を呼んでいた。彼がまだ長崎の出島で仕事に精を出していた最中に、オランダ東インド会社の役員会⁽¹⁾は彼を勇気と的確な判断力を持つ人間だと判断して、上級商務員⁽²⁾と同時に（任地未定だが）外地のどこかの総督に任命した。しかし、有能な上級商務員をいつまでも無任地の総督に留めて置くこともできず、彼の適任地を物色したところ、非常に物資が豊富で、地理的にも重要で、しかも、時々、暴動が起きたりする物騒なところで腕利きを必要とする台湾はどうかということになった。

コイエットは喜んで新しい役職を受託した。彼自身も、何もうるさな仕事をしなかった前任の総督に代わって、直ぐに何か良い仕事ができるであろうと考えた。また、台湾総督は島の西南端にあるゼーランディア城に居を構え、全てはそこで命令すれば良いので、鎖国下の牢獄の島、日本の出島から出て来た人間には最適であろうとも考えられた。

確かに当時の台湾の原住民は、文字通り「首狩り族」であって、頭骸骨を

*人文学部教授－比較宗教学・比較言語学・文化人類学

自分たちが生活をしている小屋の鴨居の先に最高の家宝として掲げて見せ付ける獐猛な部族であった。オランダ人も中国人も、コイエットもそのことは良く知っており、原住民とは信頼関係はおろか、直接に会見して話をするとかという交流関係は一切持っていなかった。そこでコイエットは日本の出島に滞在していた時から、もし、国姓爺が台湾を攻めて来たとしても、原住民との関係が巧く行くか、果たして島全体の制圧ができるだろうかと疑問を投げ掛けていた。

そのためオランダ人の牙城ゼーランディア城は厚い城壁と多数の大砲を装備し、訓練の行き届いた多数の傭兵を常備していた。もし、コイエットが牙城を離れて原住民の居住地へ足を踏み込んだとしても、「オランダ人！、オランダ人！」と言って（長崎のように）一団の子供たちが後続しては来なかったであろうし、まず、台湾のどこにも、大名も、奉行も、通辞もおらず、外国人の生活を圧迫し、制限し、奇妙な理由を付けては、高価なものを意地汚く奪い取る（奇妙な）人間は住んでいなかった。まあ、（キリスト教的に言えば）「天の神」が全世界を支配しているのであろうが、また、オランダ東インド会社も重役の「十七人」に支配されているのだが、台湾に関する限り、実際には「総督」が支配していた。この「自由さ」を、長らく日本で虐待され続けていたこのスウェーデン人が特に「魅力」を感じ、飛び付いて取ったのではないだろうか。⁽³⁾

コイエットは愛妻と愛児のいるバタヴィアの自宅でしばらく水入らずの骨休みをしてから、家族同伴で台湾総督府の牙城ゼーランディア城へ引越しをした。コイエットの愛妻「麗しのスザンナ」が亭主が大喜びで持ち帰った「大栄転」と牙城への「引越し」をどんな気持ちで受け止め、随従したのか、誰もが想像ができた。今ここで、真実を暴露すれば、「彼女は最小限に喜んだ」と書くだけで充分である。なぜか？ その理由は全く簡単明瞭であった。母国ライデンを遠く離れた東洋の異国の幻想的なお城の中で贅沢三昧な生活が一生涯できるかと夢見ていたのに、バタヴィアに比べて見ると、社交界も、お客も、美食も、何もない所で、戦闘準備中の城内での幽閉生活のみが待っていたからである。

台湾での生活は原始的であった。また、気候は凌ぎ難いものであった。城内での住民とはオランダの商社員たち、数人の祭司たち、士官としての軍人たち、その他多数の、実際には千人ほどの傭兵たちのみで、連中は、ヨーロッパ人だが「三十年戦役」を命からがら生き抜いた末に失業し、わざわざ地の果てにまでやって来て傭兵となった「ならずもの」たちであった。

コイエット総督夫人に納まったスザンナは、誰の眼から見ても、オランダ人界限で今や最高の地位を獲得した女性でもあった。しかし、台湾ではヨーロッパ人女性は皆無に近く、女性といえば、傭兵などの相手の中国人女性や（ヨーロッパ人と現地人との間に生まれた教育も定職もない）混血の女性が競って城内へ出入りしていた。また、熱帯の風土病がいつも蔓延し、城内の病院は50床だが、いつも入院患者が満員であり、死亡率は恐ろしく高かった。しかし、総督夫人のように社交的人生の快樂をお望みの方にはゼーランディア城でも極少なから明るく楽しい面も提供はできた。

コイエットは1656年6月30日付で台湾総督になったが、台湾赴任までのバタヴィアでのコイエットの生活について特に語ることは何もないが、日本からバタヴィアに帰った直後、もう一人のスウェーデン人、ニールス・マットソン・シェーピングに会っていることを述べる必要がある。彼は牧師の息子で、彼がバタヴィアに来たのは1649年4月30日（故国スウェーデンではヴァールボリイ祭という春祭りの前夜祭）にオランダ船の船員としてであった。彼は現地で傭兵となる代わりに本国で徴兵検査を受けて兵役中であった。彼は後にスウェーデンに帰国し、履歴書を提出し、スウェーデン海軍の士官に（後に海軍元帥にまで昇進）就職したが、その時に書いた履歴書が現存していて、バタヴィアでコイエットに会い、お世話になったことが（中世スウェーデン語で）書かれている。

「1654年にわたしは御主人（会社の上司のことか？）に彼の親友でもある有名な、そして、スウェーデン生まれの、あのフレデリック・コイエット氏に紹介されて会見しました。氏はタイオワンまたはフォーモサ島の総督です。氏はわたしに中国沿岸地方を旅したのか、特にヨエール（ジョホール？）、トンキン、シアム、チオンパ、コイナン（越南？）のことを詳細に

質問されました。

もし、タタール人が全中国を占領しているのなら、なぜ武器を取り上げなかったのかと問われましたので、わたしどもは海岸地帯を巡航したのみで、内陸までは入りませんでしたと答えました。わたしたちはコイナンで停泊し、水と食料を買い込み、タイオワン島に向けて航行しましたと、告げました。』⁽⁴⁾

コイエットは上級商務員で商館長の歴任者であり、決して軍事専門家ではなかったが、軍事面の認識はちゃんと持っていた。そこで彼はニールス・マットソン・シェーピングを伴ってジャンクを出し、南中国の沿岸地帯を航行し、港湾状態を調査している。ニールス・マットソン・シェーピングはコイエットとの視察だけで決して満足はしなかった。この疲れを知らぬ旅人は事のついでに、外国人に対して固く扉を閉ざした謎に満ちた国日本を訪問したいと思い、日本行きのおランダ船に乗り組んだが、その船はタイオワンのゼーランディア城を出帆後難破の憂き目に遭ったらしい。彼の記録を見てみよう。

「ある時、大海が荒れ狂い、わたしたちを散り散りにしてしまった。わたしが司令官であった船はタイオワン島訪問中に（岩に）叩き付けられ粉々になった。（難破した船員たちは）材木の破片に胸を叩かれて死亡した者や、漂流物によって生命が助かった者や、いろいろだが、皆全く酷い状態だった。わたしたちは皆、日本へ行ってみたいという強い希望で出発したのだが、大災難に遭遇したため、引き返すのが最善の策であった。」

そして、この2人のスウェーデン人は再びゼーランディア城で出会った。コイエットは彼、シェーピングに対し特別の関心と好意を示した。また、同様にこの台風で遭難し、九死に一生を得て戻って来た船員には、ゼーランディア城内の病室で最高の治療が受けられるように取り計らった。シェーピングの（前述した）履歴書には感謝の気持ちが厚くつづられている。

「1655年、フレデリック・コイエット総督の推薦状のお陰で、わたしの健康もかなり回復して来た。そして、ある機会にわたしはジャワへ行く船に

乗り、12月24日に到着した。……」

他のスウェーデン人たち、例えば、ヨーハン・スハーデル(シェードレル)、オーロフ・エリックソン・ヴィルマンと同様に、ニールス・マットソン・シェーピングはオランダ東インド会社の仕事に満足はしなかった。その後、彼は膨大な旅行記を書いたが、オランダ人に対して憤りを至る所に噴出させている。多分、オランダ人たちからの同様な軋轢が非オランダ人のコイエットにも掛かっていたことは充分に考えられる。

コイエットは台湾総督、即ち、ゼーランディア城の舵取りとして赴任するのだが、その前に台湾とその住民について勉強しなくてはならないことがたくさんあった。台湾は最初スペイン人によって発見され、特に(ヨーロッパと比べ)異様な美しさから「麗しき」という意味の言葉「フォルモサ」が呼称された。この島はその名の通り、各地域毎にそれぞれに違って美しかった。⁽⁵⁾

1624年、オランダはこの島に足場を築くことを決定した。それは南シナ海における海上交通を監視し、必要あれば直ぐに護衛艦隊を派遣し、危険な貿易航路を制覇できる状態を築きたかったからである。特にバタヴィアと長崎という収益は大きい危険も大きい会社の重要な遠洋貿易航路の中継地点としても利用できた。最初、オランダ人たちは台湾の経済的な意味をあまり高くは評価していなかった。しかし、中国からの移民たちが増え、海岸地帯の平野から山頂に向けて農地を開き勤勉な労働により豊かな農産物を収穫していた。コイエットが赴任した当時、台湾は東インド会社の金鉱と言える程になっていた。中でも、米、毛皮、樟脳などは利益が高かった。

その年(1624年)、オランダは中国人が「タイオワン」と呼んでいる小さな砂州島に護衛艦を派遣した。この島は台湾本島の先端とは長い紐のような砂峡でつながり、その内側には自然に良港が形成されていた。しかし、それは小さな湾内の小さな港でしかなかった。この湾内には小さな川が流出していた。この湾の反対側には現地人の居住地があった。数百軒の家(小屋)があり、後のサッカム(赤崁)の街の胎動であった。

オランダ人は台湾の（原）住民も地理も気候も知らなかったため、最初は、傭兵や船員で構成した強力な戦闘部隊を上陸させた。しかし、オランダ部隊はこの砂州では人間には遭遇しなかった。そこで、彼らは救命ボートを使って海岸沿いに進み、湾の外の陸に上陸した。すると、今度は原住民に出会った。それは全身裸体の男性で弓と矢の納まった矢筒で武装していた。この異様なヌード氏は非常に賢い男で、突然現われた客人たちを理解することができた。そこでオランダ人たちは彼の服装などには、わざと無関心を装い、隣の村がどこにあるのかを紙に略図を書いて質問した。

オランダ人たちはこの島（台湾）に幾人かの中国人が移住していることは知っていた。そこで中国語の通訳も同伴していた。すると、このヌード氏が一行を自分の村落に導き、一人の中国人男性を連れて来た。やがて、この男性は通訳と同じ言葉を話しだした。この年若い中国の男性はホー・ピンクワ（何廷斌）⁽⁶⁾ という名前で、何と通訳を職業とする者であった。彼の仕事というのは中国移民たちと原住民との言語的コンタクトの必要を解決する役目を担っていた。彼はこの島（台湾）の現状を語った。そして、オランダ人が砦を築いて居住したことは、住民の誇りであり、住民はオランダ人を大歓迎していると言うのである。「オランダ人が大歓迎されている」などと意外なことを語ったためか、彼は即座にオランダ東インド会社の職員としての採用が決定された。

ホー・ピンクワが話すには、台湾の人々は王様や領主様を欲しがっている。また、組織された社会生活など、どこにもないので、どの中国人の村々でも、人々は何でも好き勝手なことをやっている。また、島の内陸には山脈が走り、熱帯林が覆い、そのあちこちに原住民が住んでいる。彼らは体中に刺青を彫っており、狩猟生活をしている。時々、中国人たちの前に姿を現すが、それは彼らの勇気を奮い起こさせるために、中国人の首狩りを行うためである。

オランダの台湾支配は全くこのホー・ピンクワという男によって導入され、幕が開けられ、彼の指図、いや助言と言うべきか、によって動かされた。そして、このオランダ人による台湾支配も28年後に、また、この男によって幕が閉まるのである。実はこの男がフレデリック・コイエットの顧問というか、

相談役というか、担ぎ屋というか、奇妙な一役をゼーランディア城で演じ切っていたが、とどのつまりに、その全てを国姓爺に裏切り渡すことを考え、その説得から、指南役まで買って出たのである。(彼の本名はホー・ピンクワであったが、オランダ人たちは彼を唯、「ピンカ」とだけ呼んでいた。)

台湾の征服は何の抵抗もなく、実に容易に実現した。ホー・ピンクワは決して嘘は言っていなかった。台湾には支配者が居なかった。中国では内戦が長く続き、人々は疲弊していた。しかし、満州族の侵略も台湾にまでは届かず、戦乱の危険はなかった。オランダ東インド会社に困ったことといえば、スペインとポルトガルの熾烈な競争があり、彼らは新興のオランダ勢力を退却させる隙を狙っていた。

作戦的に見ても台湾、特にタイオワンは場所が良かった。それは単に砂州の後に自然の良港があるばかりではなく、海岸線も非常に良かった。そこにはオランダの商船も軍船をも繋留できる上に南中国の海岸線が遠望できた。地理的にもバタヴィアや長崎に向かう船の理想的な中継基地であった。更に操船上、便利なことは船をあまり岸から離さずに港に入船させることができた。

そこで、バタヴィアから軍人たちがやって来てタイオワンに築城を始めた。直ちに防御柵が築かれ、臨時の船着場が作られ、バタヴィアからの商船や対岸の中国からレンガや石材を運搬する船を接岸させた。当時としては、物資を運搬するには水路を使わねばならなかった。確かに、レンガを焼こうと思えば、台湾でもできたかもしれないが、台湾で労働者を調達することが未だできなかった。何よりも原住民とは何も交渉はできなかったし、道一本満足にできていないこの島で重くて、場所も取るたくさんの荷物を、船から引き揚げ、それを更に陸上を通して運ぶなど当時は全く考えられなかった。全ての物が海上交通で運ぶのが最も安くて便利な時代であった。

1632年に強固な城壁と4つの半保塁を備えた1m以上もの厚い石の胸壁ができあがり、その各所に大砲も備えた。敵が城壁に到達するには高い壁に囲まれた保塁を3カ所越えなければならなかった。海面に向かっては5m以上の高い要塞の防壁が組まれ、砲撃砲6門が備えてあった。さらに、港の入

り口には石を積んだ船数隻を極秘に沈めていたので、港内へはパイロットなしには入港できなかった。こんな物を作った目的は、平時でもパイロットなしには入港できなくするためであった。もし、パイロットなしで人工の浅瀬を逃れようと思えば、要塞の側へ近付いて来なければならず、そうすれば必ず砲台の至近距離内に入り、美味しい餌食となった。

城の中には執務館があり、そこに総督は居住できた。その他に教会、武器庫、営倉があり、また、小さな広場もあり、そこで死刑執行が行われた。その反対側の陸に向かって工場と倉庫が建っていた。また、城塞の直前の海面には船を繋ぐピア（岸壁）が突き出ている。

この城塞は「ゼーランディア」と命名された。それはオランダが最初に派遣した台湾探険船の名前にちなんで命名された。普段はお金にケチなオランダ人たちも今回だけは費用はあまり気に掛けなかった。ゼーランディア城は当時の最高の築城術の粋を極めて建設され、難攻不落とされていた。オランダ人が台湾を簡単に入手したというニュースは競争相手国の嫉妬心を掻き立てた。

1626年、早速、スペイン軍がマニラから台湾にやって来て、台湾の北側の2つの島に上陸し小さな城塞を建設し、そこに、サン・サルバドル（聖救世主）とサン・ドミンゴ（聖日曜日）という宗教的な名称を習慣的に付けたが、その島は台湾のキールン（基隆）とタンスイ（淡水）の港外の目先に位置していた。それはオランダ人の目には腹立たしいものであり、台湾の北端の防備も強化せねばならぬことを悟らせた。スペイン人がその内に折りを見て手を伸ばし、台湾本島に上陸することを暗示したからである。

1641年の夏の終わり頃、ゼーランディア城総督⁽⁷⁾のパウルス・トラデニウスは「今こそ時が熟した」と悟った。原住民、中国人、普通のヨーロッパ人達を急いで掻き集め、スペイン人の城塞の前で暴動を起こさせた。そして、まるで劇場の舞台のような殴り合いや叩き合いをやらせた。そして、トラデニウスはスペイン要塞司令官に騎士道に沿った礼儀正しい手紙を書き送った。内容はオランダ軍の装備が非常に優れており、兵員の数も多いので、戦争の勝敗は明らかである。そこで、知恵と常識を働かせ、戦闘を経ずして捕

虜となり、城塞を明け渡してはどうかという妥協案であった。しかし、スペイン人の淡水城塞司令官ポルティリオは誇りと格式を持って返事を書いた。

「わたしは大戦には慣れている。先般の（ベルギー）フランドル地方での戦いにも、また、その他の外国での大軍相手の大戦にも参加した経験を持っている。故に爾後、このような馬鹿げた意味内容の手紙は2度と書き送らないで欲しい。願わくば、大いなる神の御加護の下に我が方の将軍も士官も兵士もおのれの持ち場で最善を尽くして戦い切れるように！われらはスペインのクリスチャンである。いつも信じる神の御加護の中にある。願わくはわれらの上に神の御恩寵が更に豊かにあるように！

1641年9月6日、われらの主砦サルヴァドール城より、

司令官 ギンサロ・ポルティリオ」

このスペイン人の司令官は決して虚勢を張って空威張りをしたわけではなかった。その直後にオランダ艦隊がサルヴァドール城塞を砲撃し始めたが、城塞内の砲撃の方が遙かに優勢であったため、オランダ側はスペイン側の何も破壊できず、期待外れの惨憺たる結果で引き戻った。そこでオランダ側は計略を換え、陸軍の援軍を上陸させて再攻撃した。しかし、スペイン軍は獐犢な勇氣を持って対戦したため、オランダ側は、またも、退却せざるを得なかった。

かくして第1回目の遠征は陸海両軍を持っていたトラデニウス側の大敗に終わった。しかし、1642年8月、オランダ軍が更に多くの軍船と上陸部隊を連れて淡水にやって来た。この時、ポルティリオは休暇中であつたので、応戦の準備は何もしていなかった。そこで、急速、マニラに援軍を要請した。しかし、マニラにいた彼の同僚は、同僚が戦争に遭遇したことよりも更に大切な、自分の仕事の方に忙しかった。そこで、たった8名の傭兵と極く僅かの食料だけを送って寄越した。この戦争での両軍の差は余りに大きかった。1642年8月24日、ポルティリオは捕虜となったが、このスペイン騎士道の権化の司令官はスペインの貴族騎士として、悲しくも美しく、戦いに破れた自分の将兵たちを最後の最後まで優しく庇い労った。無慈悲で苛酷な戦争の結

果は、それ以降、その地でのスペイン勢力は壊滅し、台湾を支配する者は唯、オランダ人のみとなった。

そこで、このケールン（基隆）事変の翌年（1643年）、オランダ東インド会社は当時、社内で最も頭の切れる男としてフレデリック・コイエットを台湾総督という肩書きでゼーランディア城に派遣した。会社はこの男に植民地を建設させ、安定した商業活動を活発化させ更に発展させようと企んでいた。

コイエットは台湾に到着するや否や、彼が持っていた旺盛な精力と実務に熟練した眼により、自分の新しい役割を悟った。つまり、このベルギー人の血が体内に流れる彼はこの島がオランダ人の統治下にあることをこの島に在住する中国人や原住民に告示し、容認させた。それは非常に原始的な方法だったが民主主義的な形態だったと言える。即ち、各村落毎に「長老」を選出させ、権威の象徴として、オランダ東インド会社の社印を刻んだ銀板を下げた杖を授けて回った。そして、その長老たちを集めて長官の意志や忠告を伝達する「国会」を開催したが、何も決議はしなかった。また、住民たちはその「国会」を通して自分たちの希望や意志をゼーランディア城の長官に届けることも可能にした。そして、会社側も希望や要望を「国会」に提出することもできたし、駐在社員の内の最も頭の切れる男を住民係として、その対応に当たらせた。また、重大な問題の裁判には長官の意のままの法解釈で判決する裁判官もいたが、多発する犯罪の裁判にはヨーロッパ人4人と中国人3人で形成された判事裁判に任せた。残念ながら、原住民の中から彼らを代表した判事は選ばれなかった。

全台湾を征服することはオランダ人にとって、非常に簡単な作業で達成できたが、そこを支配し、管理して行くことは大変な苦勞であった。この小さな島の中で何と数種類もの全く相通じない言葉が話されていた。そのため長官の伝達事項は何十人もの通訳団により数種類の言語に翻訳せねばならなかった。多くの言語に次から次へと訳される毎に論旨は誤訳される可能性が増えた。この小さな島、台湾の民族と文化は多様なのであった。

台湾の原住民はネグロイド（黒人系）マレー人である。⁽⁸⁾ 中国本土からの移民が平地や谷間に増え、開墾を始めたので原住民は熱帯樹茂る山林の奥へ奥

へと移住して行った。そして、彼らは自分たち独自の生活を維持して行くための権利を頑固に防衛した。それは1800年代になっても台湾のある地域は探険されておらず、当時でも首狩りの風習は決して珍しいことではなかった。また、少年が成人となるイニシエーションの儀式も厳粛に執り行われていた。それはある夜、死人の頭蓋骨が一杯に集められた家に入れられ、男が最大の歓喜を味わう瞬間に、敵の頭を切り落とすことをさせられた。そのため、中国人もオランダ人も首狩りをする原住民が生息する山岳地帯に足を踏み入れることはなかった。しかし、何にも例外はあった。例えば、外国から熱望されている輸出用の高価な樟脳の木を入手する場合には、重武装し戦闘形式を取って山地に入って行った。しかし、隊は山林の中で原住民に後方から狙われ全滅することもあった。中国人は原住民を「生蕃」(せいばん)(野蛮人)と呼んでいたが、決して一民族ではなく、地域毎にいろいろな種族や部族に分かれていたようである。ところで、ある種の部族は山地に入らず平地に残って生活していた。その内に彼らの中には中国語を習得し、中国服を着用し、中国風の生活を取り入れた者も出てきた。中国人は彼らを「熟蕃」(じゅくばん)(文明化された野蛮人)と呼んでいた。時間は掛かったが、中国人たちも平地や海岸地方に点在する彼らとの共存を容認していた。しかし、山地に住む「生蕃」は中国人もオランダ人も自分たちの領土に迎え入れなかった。

どこの国のどの地にも蔑まれた部族や階級が存在することを知っていたフレデリック・コイエットは中国の「客家」(はっか)のことを勉強していた。理由もなく彼らは行くところどころで軽蔑され冷遇されていた。1400年代から1500年代に多くの「客家」が広東地方から台湾へ移住し、誰にも虐待されない自由な天地を開拓していた。数億という人間が住んでいる中国で、なぜ、「客家」の人々は軽蔑されるのか。彼らには多くの美德があり、肉体的にも何等劣るところはない人々なのであるが。また、熱帯地方では「客家」の人々は焼け付く暑さの中でも鎌と鋤を手を持ち、あまり休まず、奴隷のごとく熱心に働き、原野を瞬く間に耕地に変え、稔り豊かな収穫地にすると本には書かれていた。

賢明なオランダ人は植民地政策とキリスト教の布教政策を混同することは

なかったのだが、こと台湾においては例外をしてしまった。バタヴィアから熱烈なファンダメンタリストの宣教師が台湾へ移住してきたことに端を発した。先ず彼らは礼拝堂を建設し、毎週、日曜日が来る毎に、中国人と文明化された原住民たちを掻き集め、長々とオランダ語でお説教を始めた。そして、会衆が疲れきった頃に最後の賛美歌を歌わせ、最後のアーメンを唱え礼拝を終わった。そして、その後に、決まって御飯が盛られた飯椀が会衆に配られた。その後、学校教育が子供と大人両方に行われた。このライスクリスチャン運動は、島内の住民には大人気となり、国姓爺が台湾を攻撃する1661年まで続行していた。

さて、ゼーランディア城だが、当時のものとしては、他に比べると、かなり堅牢に造られていたが、補修も必要であり、また、何としても、台湾本島の沿岸に足場を築かない限り、浅瀬に浮いた一戦艦に過ぎなかった。調査すると丁度、ゼーランディアのやや北側の背後となって隠れている海岸に非常に良い港が造れる大きな河口があった。

そこで早速そこに3層の城を築き、その周囲に城砦と砲門を巡らせ、そこをフォート・プロヴィンシアと命名した。しかし、この城はどう見てもゼーランディアのように重装備をする必要は考えられなかった。と言うのも、もし海から攻めが来れば、ゼーランディアの砲撃で押さえられたし、島の陸側から攻めが来ればこれもゼーランディアが十分に迎撃できると考えられたからである。

1656年6月30日にフレデリック・コイエットは台湾長官に任命され、彼の名声は彼の生涯で最高値に昇った。そして、それと同時に、オランダ東インド会社に莫大な利潤をもたらす素晴らしい貿易商品を産出するこの植民地の島の全責任者となった。しかし、それは決して無事安泰な生活ではなく、全てに小競り合いや嫌な事件が付きまとった生活であった。

実際にはオランダ人は比較的簡単に台湾の海岸地帯に住んでいたポルトガル人を追い払うことができた。このような事態からコイエット自身も連中とはそんな大した事件は起こるまいとたかを括っていた。実は、この好まざる客（ポルトガル人）を追い出すには、他の好まざる客（中国人）の手を利用

したまでのことであつた。コイエットたちのやったことは入口と出口の扉を広く大きく開けて番をしており、追い出される者には出てもらい、乱入する者には入ってもらっただけであつた。それでオランダ人の築いたお城はどこにも傷がつかずに立ち残つた。

中国人の移住者達は年々増えて行き、彼らは平地の開墾作業に汗を流して根気良く働いた。そして、その内に平地に暮らす島民の大半は数の上からも中国人となり、彼らの言語も文化も島に定着していった。少数のオランダ商人、軍人、神父と傭兵たちがこの多数の島民を押さえて、支配していたのだから驚きと言えば驚きである。島内のどこにも、外部からのてこ入れがない限り、支配者層たるオランダ人に対する抵抗組織など形成されなかったのも不思議である。しかし、一旦、事が起これば、オランダ人の立場は急に危険にさらされることは明らかであつた。しかし、オランダ人は台湾全島を所有することには大して意欲を示さなかつた。彼らの頭の中には、将来、何かが起こり、何かが跳んできたとしても、何としてもゼーランディア城を防御し堅持さえすれば、全てが解決できるということのみを考えたのであつた。

しかし、コイエットだけは既に日本の長崎は出島にいた時から、国姓爺が中国本土で貿易合戦で苦戦をしており、遅かれ早かれ手を変えて来るであろうと睨んでいた。何しろ臨戦態勢で重装備した軍隊を保持するには相当の軍資金がなければならず、彼の根拠地であるアモイやケモイだけの（密）貿易の収益だけでは、到底まかない切れないことは、奥を見抜く目を持つ者には明らかに見えた事実であつた。そして、美味しい汁（乳と蜜）⁽⁹⁾が流れ出ている台湾が目前にあるのであるから、手を伸ばして取らない方が馬鹿であつた。

コイエットは長崎から（台湾長官就任の十数年前から）何回も何回もバタヴィアのオランダ東インド会社の役員会⁽¹⁰⁾に宛ててこの事実を報告し、早急に彼（国姓爺）の軍隊が台風の如くに突如襲って来ても対抗できるように（タイオワンの）防御体制を強化することを提案した。台風の接近を感知するバロメーターの針は大きく昇っていると言った。⁽¹¹⁾しかし、バタヴィアは日本からも、台湾からも、遙か遠く離れて位置していた。コイエットの熱弁で達筆な文章も、遠くから読めば、たかが減び行く明王朝にしがみ付いて戦って

いるごまんという中の一中国海賊のことであり、軍船と言っても筵のような帆を張った原始的なジャンクの寄せ集まりに過ぎず、今までも何回もジャンクがオランダ人の築いた城砦を襲ってきたが、何らこちらに犠牲もなく、見事に無事平穩に鎮圧されたではないか、軍人ではなく対戦経験もない商務官上がりの商館長が鉄砲の音を聞いて肝を冷やしているのだろう、可哀相だが、慌てなくてもよい問題だ。何しろ今度、ゼーランディア城に納まった台湾長官は、頭の中に融通という隙間が全然ない意固地なスウェーデン人だから仕様がなしたことだ、と思われた。特に二期間という長い間、日本の出島で隔離されていたので、孤独恐怖症にでもなったのではないか、だから、あの賑やかなゼーランディア城に戻っても、神経は回復せず、恐怖心はつの一方で、全てが病気のせいだろうとまで囁かれた。

今にして思えば、確かにコイエットは、狼少年のように、あまりにも大きさに最悪の事態を想定して、まだ何も起こっていない戦争のことなどを書き過ぎた感がある。書簡を受け取ったバタヴィアの会社役員会もコイエットの大げさな苦言と大出費を促す提案などに耳蝸ができてしまった。そして、何を言ってきたところで、「またか、大げさな」で片付けられてしまった。その結果、バタヴィアに何を依頼し、要求し、懇願しても、全てが「無しのつづて」で帰って来た。1650年になってオランダ本国の会社役員会がゼーランディア城の警護兵員の定員を1,200へと増員を可決した。その報告を手にしたバタヴィア城では、これで「申し分なく十分」とした。何しろニコラス・フェルブルフは数人の傭兵だけで襲い来る獐猛な敵を瞬く間に撃滅してしまったのではないか。⁽¹²⁾ 例え数万の中国海賊がタイオワンを襲って来たって、瞬時に撃滅できるだろうなあ、などと囁き合っていた。

確かにコイエットが台湾総督（知事）に就任したことは台湾という島で実際には副王の地位についたのであるから、人生の立身出世の榮譽を飾ったものであったに違いはないが、既にこの時点でコイエットは人生の子午線を過ぎていた。彼について、会社では誰もが異論なく、「仕事には忠実で熱心な上に豊かな経験を備えた最高の紳士」と表面的には言ったであろうが、オランダ人でもない男、つまり、スウェーデンという外国の国籍を持つ男に、ただ、

仕事に熱心で、会社に莫大な利潤を与えたというだけの理由で、会社の上の上にあるオランダという国の大臣にも相当する地位と名誉を与えるべきかということが、この時点で密かに囁かれ始めた。これは彼の義弟のフランソア・カロンに対しても密議された。カロンは知る人ぞ知る如くオランダ東インド会社の実務を切り回し、未経験だった東洋貿易を軌道に乗せ、オランダという国に膨大な利潤を与え、オランダを大貿易国に仕上げた立役者であった。彼もオランダ人ではなく隣国、現在のベルギー人であった。外国人の有能な者に対するオランダ本国人の羨望と嫉妬は非常に大きく強いもので、彼らオランダ人は隙間さえ見つければ、くちばしを突っ込み、手をこまねいて有能な外国人を失脚の罠に掛けるのであった。晴天の霹靂、突然にカロンは本社に召喚され、会社の地位を利用して巨億の私利を貪った疑惑で喚問された。言下にそれを否定したカロンは怒り狂うが如くに会社を辞め、当時オランダの強敵となりつつあった新興国フランスの東インド会社に入社し、公然とオランダ東インド会社と対決した。このことにオランダ東インド会社の役員たちは啞然として口を開けたが、神学的用語で「罪の代償」⁽¹³⁾ という用語があるが、実は会社は義弟カロンの罪を義兄コイエットに掛けて来たのであった。

勿論、有能なコイエットの人生も、その後の栄誉出世が義弟カロンの失脚で妨げられたなどという単純素朴なものだけではない。コイエット自身も、彼の身近な者、つまり彼の同僚たちの羨望と嫉妬による敵対行為にしばしば悩まされた。しかし、コイエット自身に天来の個性と言おうか、何事に対しても冷静に構える気性が備わっていて、喧嘩を売ってまで事の白黒を捌く等ということはしなかった。例え敵対する人物が眼前に現れても、いつも笑顔で迎える「敵にも紳士的に接する貴族的な品格」⁽¹⁴⁾ を備えた人物であった。コイエットは出島時代にニコラス・フェルブルフに個人的に書簡を送った。コイエットは彼の手元に届いた最新の情報の内で信頼性の確認ができたもののみを通知したのだが、ところが、それが元でフェルブルフは怒り狂う敵対者と変わった。何しろ以前に台湾長官を歴任した男に向かって、外部から余計なおせっかいは焼かれ、いかにも他人の畑の状態を熟知したような口つきで、頬をなぞて来たからである。

コイエット自身も、会社の役員会（参事会）のボスたちと腹の探り合いや小さな衝突を起こすことなしに、仕事を続けては行けなかった。しかし、会社の普通の同僚たちに比べると、ずば抜けた才能と広くて深い知識を持っていた。彼の兄、ペーテル・ユリウス・コイエットも同様な人物で、ヨーロッパの大国にのし上がって来ていたスウェーデン王国の中でも、最も有能で信頼の置ける外交官という折り紙が付けられ、英国大使に納まった人物であった。

コイエットは胸騒ぎの解決を目論んで、将来の展望としては、戦争に巻き込まれて勝つよりも、戦争を回避した方が遙かに利があると読んでいた。そこで、先手を打って国姓爺と取引し約束を交わすことを決心した。そして、彼は例えこの策が失敗したとしても、国姓爺の計略を正確に測定する絶好の機会を得ると考えていた。

1624年、オランダ人が台湾島の土の上に最初の足跡を付けた時には原住民の住む村の近くを走り回って遊んでいた中国人少年ホーピン（何斌）もピンクワ（何廷斌）⁽¹⁵⁾ という名前となり、オランダ商館の中でも最も有能な現地人職員として重宝に取り扱われて仕事をしていた。

フレデリック・コイエットは第12代目で最後の台湾長官であったが、⁽¹⁶⁾ その頃、ピンクワは商館内で代表役員の一人にまでなっていた。彼はオランダ人に忠実に仕え、オランダ商館に多大の利益をもたらし、どのオランダ人からも、感謝される人物になっていた。しかし、その陰では、人目に知られぬようにしては、会社の屋根の下で自分の裏商売を商い、多額の裏金を稼ぎ、その頃では押すに押されぬ資産家となり金満家となっていた。

事の裏を知らなかったフレデリック・コイエットはピンクワを商館職員の中から抜擢し、敵の総本山アモイの国姓爺の所へ平和の鳩を飛ばす想いで送り届けることとした。しかし、この計画はその翌年の1657年になるまで実行されなかった。なぜか。そこには歴史以外の個人史があったからである。

ここでコイエットの私生活を見てみると、「麗しのスザンナ」は御主人、フレデリック・コイエットが台湾長官に任命された直後から病み付き、惜しくも1656年10月に他界した。台湾長官という大任を仰せ遣った直後のコイ

エットの興奮と不安の交錯する心のもだえを休めてくれるところの話ではなく、彼女を看病し、日毎に弱って行く彼女を慰め励ます苦痛の連続の後に、死去という最悪の事態が起きた。最愛の妻の死去の喪に服すまでもなく、母親を失った愛息バルタザル・コイエットをどう養育するかという現実の問題が急に上昇してきた。父親の苦悩など何も知らない少年は当時、ゼーランディア城の中の衛兵や砲台の間を走り回って遊んでいたが、それをそのままいつまでも永遠に続けさせる訳には行かなかった。しかし、この問題はコイエットの再婚ということで巧く解決することができた。この度の相手の御婦人は、先に他界したスザンナ・ボウダエンとは全く違った性格の女性で、一言で言えば真面目で良妻賢母型の、元商務員の未亡人でアムステルダム出身のヘレーナ・デ・ステルケであった。

1657年にコイエットはピンクワ（何廷斌）をジャンクに乗せてアモイに向かわせた。ところで、ピンクワはオランダ人がサンゲと呼んでいる中国人を雇い、同行させ二人で国姓爺に会見した。⁽¹⁷⁾

明王朝崇拝者の国姓爺は彼らに対し、非常に寛大な態度で接した。国姓爺はゼーランディア城にいたコイエットに向けて（台湾攻略はしないから）安心するようにとの確約を記した手紙を送った。⁽¹⁸⁾

コイエットは彼の耳にまで届く世間の風評を大げさに解釈して描き、それを絵にして壁に掛けるようなことは決してしなかった。国姓爺の方も彼がやろうと思う計画を事前に図に書き記して策を練るようなことは決して行わなかった。しかし、彼は時々、その内に戦争が起こるぞという噂の種をある方角に向けて放つ時があった。そして、彼が思っていたのとは全く違った結果を生むことがあった。⁽¹⁹⁾

ピンクワもサンゲも典型的な時代の寵児であった。それは古い時代が崩壊してはいるが、まだ、新しい時代が明確に到来せず、新しい価値観が見えて来ない時代であった。最初、二人は顔が見える距離の中にいたのだが、後にきびすを返して反対の方向に向かった。つまり、一人は中国のアモイに向かい、他の一人はタイオワンに向かった。しかし、二人がやったことは同じであった。それは強い領主の肩の陰に立ち、出入りする貨物の税金に僅かの上

乗せをやり、それを自分の懐に納めたのであった。そして、時間が過ぎる間に彼らの懐は重く豊かに膨らんで行った。

国姓爺が既に平和を宣言した書簡を送って来たと言え、怪しいと疑っているコイエットの心は日夜燃えたぎっていた。何が起ころうと彼は会社の莫大な利益を確保しなければならなかった。オランダ東インド会社は利益の減少とか損失には容赦なく責任を追求して来た。インド総督府のバタヴィアではコイエットの株は下がって来ていて「不吉な親父」と誤解されていた。誤解と言えば、コイエット自身も、国姓爺はタイオワン攻略の機を狙っていると誤解していた。そして、年々、中国南部から台湾への移民の流入が激増する動きに誰よりも神経を尖らせ、島内に中国系住民が急増することを心配していた。

当然、流入する移民の全てが彼、国姓爺の手先である筈はなかった。移民たちは自由と僅かな土地を求めてやって来たただけであった。しかし、移民の中には兵士が混ざっていると思われたし、また、こちらの状況を偵察するために入国する密偵と思われる服装の者もいた。そこで、オランダ人側は台湾島への移民制限を考えた。しかし、それが実際にはいかに困難な仕事であるか、やってみて直ぐに匙を投げてしまった。何しろオランダ人の人数が余りにも少なすぎた。そして、台湾全島が実に広かった。台湾全島を警備し、昼夜見張りをするなど不可能に近い途方もない大作戦であった。そこで、コイエットは移民禁止令を南中国の幾つかの港町とアモイに紙に書いて張り出せば良いと考えた。

1659年の2月にゼーランディア城がひっくり返りそうな大騒動が起こった。ピンクワとサンゲの濡れ手で粟を掴む私腹商売がばれたのであった。先ず、長年会社に採用されていた通訳のピンクワ自身が釈明を嘆願して来た。

賢いピンクワは直ぐに捕らわれ、後ろ手になった。しかし、縄が解かれると、直ぐに立ち上がり、事の成り行きの全部を自白した。彼は自分の犯した深い罪を認めた。みんなが想像した通り、蓄財して入手した全財産や土地は会社に没収されることとなった。また、彼は会社の金も着服していた。それは死罪に相当した。しかし、彼は許された。

そこで感謝感激したピンクワは謝罪と感謝のためにコイエットをはじめ、ゼーランディア城の幹部をサッカム（赤嵌）⁽²⁰⁾にあるプロヴィンシア城の商館にご招待して中国料理を御馳走することとなった。スウェーデン人のコイエットにはこの会食会の裏に仕組まれた舞台装置が解らなかった。だから、このタイオワンにおいてオランダ商館が発足して以来オランダ人の側で働いてきたこの男が何か自分の無実を証明する証拠か何かを見せて無実の弁明をするのだろうかとも考えていた。コイエットは同僚を引き連れて意気揚々とプロヴィンシア城へ乗り込んで行った。会食が始まってしばらくするとピンクワは気分が悪くなったと言い、申し訳ないと弁解をしながら美しく飾られた豪勢な部屋を出て行った。

中国人たちが爆竹を鳴らし、夜空に向かって花火を打ち上げ、お祭りの雰囲気盛り上げて行った。そして、窓の外に海にジャンクが浮かびピンクワが乗って逃げている姿が見えた。その行く先は国姓爺がいるアモイであった。

オオバカタレ、オオバカタレの阿呆ども！と波がせせらぎ嘲笑って鳴っていた。遂に会社の忠実な通訳氏は公然と裏切り者へと成って行った。彼が再びゼーランディア城の城壁を目にしたのは、彼が国姓爺の水軍がそこを攻撃した時のパイロット（水先案内）となって舳先に立った時であった。

第7章 司令官ヤン・ファン・デル・ラーン

1660年9月、12隻の軍船を引き連れてゼーランディア城の砂岸の内灘に停泊した新任の司令官ヤン・ファン・デル・ラーンの腹の中は煮えたぎる程の怒りを秘めていた。⁽²¹⁾ 彼の見解によると、わざわざ台湾近海にまでオランダ艦隊を派遣し、威力を見せびらかす必要は軍事的にも政治的にも何ら理由は見出せなかったからである。この海戦の勇者は物事を至極簡単に解釈する男であつたらしい。彼の碧眼の相眼で眺め見ると、中国切つての獐猛な海賊と言われている国姓爺も、そう簡単にオランダ東洋艦隊には手は出せない筈であった。というのも、オランダ東洋艦隊の装備も兵員の戦闘能力も（当時と

しては）世界一であったからである。だから例え、台湾総督フレデリック・コイエットが自分の意見を明確に公表したとしても、彼は姑息な商人として臆病派に所属しており、決して多数派ではなく、城砦の中でも大勢の支持者がある筈がないと考えた。

そこでファン・デル・ラーン司令官は台湾訪問をできるだけ短期間で切り上げたいと考えた。バタヴィアを出る時、彼は密かに他の命令も入手していた。ゼーランディア城が彼の滞在を必要としない時には、彼の指揮する艦隊を中国沿岸に航行させマカオに向かい、そこにあるポルトガルの要塞を攻撃し、占領せよというのであった。マカオに置き忘れて眠っていた豊かな餌を巻き上げ、司令官ファン・デル・ラーンと12隻の艦隊を台湾へ派遣した費用を捻出した上に、その御褒美として、司令官も兵員も全てを金持ちにしてやろうと会社側は考えていた。

オランダ東インド会社の艦隊では、司令官ヤン・ファン・デル・ラーンに「つむじ曲がりのヤン」という嘲笑的なあだ名が付けられていた。彼は確かに優秀な海戦の勇将ではあったが、彼の性格を描写すると、他の業務に関しては、非常に一方的であり、何でも大した理由もなく早急に決め込み、言い出したら決して自説を曲げず、手を引かない男であった。

ヤン・ファン・デル・ラーンとフレデリック・コイエットは最初に出会ったその瞬間から、既に相手を切りつけ合った。まず司令官デル・ラーンがゼーランディア城砦の埠頭に降り立った。旗艦「ドルフィン」では兵士が号砲を撃ち、楽隊員たちがドラムを叩き、長官の上陸を通告した。しかし、岸壁には総督コイエットは立ってはならず、大艦隊の指令長官たる者の歓迎を礼を尽くして示すものは誰も、また、何もなかった。そこで、司令官は岸壁の隅にあった（港湾）事務所の階段に立って、総督の到着をしばらくの間、待っていた。しかし、気持ちがいら立って来た海戦の勇将には次の侮辱が待っていた。確かに事務所の前には衛兵が立っていたのだが、艦隊指令長官の到着を歓迎する礼砲を撃てという命令は伝達されていなかった。

何か事件でも起こると、人は、各自、それぞれに違った反応をするものである。コイエットもファン・デル・ラーンもこの際にはそれぞれが持ってい

る悪い面を前に出してしまった。一方が相手を塞ぐ命令を出せば、他方は相手を噛みつく命令を部下に出した。だからこの両者が対面すべき初日にして、台湾総督コイエットと艦隊司令官ファン・デル・ランンとが心を合わせ、一致協力し、迫り来る敵と戦うなどということは「不可能」であることが明白になった。

1660年代の初頭においてコイエットは、国姓爺が台湾攻撃を計画しており、その年の3月に、または、遅くともその年の秋の初めには仕掛けて来るであろうと確信を持って会社側に警告していた。この警告はオランダ東インド会社の東洋各地の植民地の長官や商館長たちにも通達されていた。また、会社と取引していた中国の商人たちにも通達されており、戦争となると皆自分たちの商売が駄目になるので、不安が募っていた。

特にその頃、中国人の商人の台湾からの輸出が、つまり物資の搬出が、輸入に比べると極力、急増して行っただけで、近々、何かが起こると思われていた。近隣の情勢に詳しい中国商人たちが自分の商品を安全な（台湾の外の）場所に移し始めたからであった。特にコイエットが動かしているオランダ海軍の沿岸警備中のパトロール船が中国商人のジャンクを一隻検問し、事情聴取してみると、アモイからやって来たことが解った。そこで船頭をコイエットの面前に連れて行き、アモイの様子を詳しく聴取してみると、戦争の気運など全然ないと堂々と否定した。しかし、そのジャンクを更に詳しく検問してみると、中国語で書かれた書簡が18通も見付かった。そして、その宛先は台湾に移住していた船頭の親戚⁽²²⁾に宛てたもので、危機が迫っていることを知らせたものであった。

コイエットの目前に連れて行かれた中国人は、彼に対してもオランダ東インド会社に対しても忠誠を誓い、渡航許可書を入手していたと同時に、中国人にも国姓爺に対しても忠誠を誓っている筈であった。それにしても、その頃から急に国姓爺の側の（船の）動きが台湾において活発になってきていた。しかし、中国の貿易船の行き来が激しくなったからと言って、どうしてそれが国姓爺が戦争を仕掛けている証拠だという証明ができるのであろうか。

ゼーランディア城砦の中の処刑所には、夜になるとうめき声が聞こえてく

る。それはオランダ人のうめき声で不平不満を述べているのだという噂が立っていた。また、ゼーランディア城砦は壁も厚く、内海は外からは見えないが、水中から空高く火炎が吹き上げているという噂も立っていた。また、コイエット自身も奇妙な噂話のネタになってしまった。

「コイエット公爵さまがある日、部下の者と共に城砦の岸壁に立っていると、鯨が泳ぎ込み、外海へ出て行ったが、その一頭は背中に人間の形をした生き物を乗せており、赤い着物を身に着けていた。そして、すいすいと水中を泳いでいた。」という噂も立っていた。⁽²³⁾

さて、コイエットの面前に連れ出されて尋問された中国人のジャンクの船頭は、国姓爺の軍のアモイでの戦闘準備については一切、知らぬ、存ぜぬと答える者と、やつは明王朝の復興を企てており、多くの軍船をアモイに集結させ、台湾攻撃を準備しているのを見て来たと堂々と語る者が出て来た。この通り情報が不揃いなので、コイエット自身も正確な状況判断に苦心した。しかし、その頃の顕著な動きとして、中国の商人たちが自分の商品を安全に保管することに注意しており、一方では商品をアモイに移し、国姓爺の支配下に入り、安全を確保する手を打つと同時に、他方では台湾在住の中国人の倉庫に保管してもらっていた。

そのような動きからコイエットは考えたのだが、中国人は、自分に比べると、非常に早く正確な情報を入手できるし、行動も起こせるようである。その情報は国姓爺から彼の直属の長老たちに伝わり、そこから直接に届くのであろう。また、台湾近海に出漁している漁船も絶えず国姓爺のジャンクと連絡を取っているに違いない。

コイエットは長い物には巻かれ、大嵐が来れば腕組みをして、一過を我慢して待つような人間ではなかった。それまでもバタヴィア城には数回にわたって襲撃の警告と城砦の補強と兵員の増強の要請の書簡を書き送ったのだが、全てはナシのつぶてであった。それどころか、彼には分からず屋、頑固者、ヘソ曲りなどというあだ名が増えただけであった。そこでこの問題はもう他の誰にも頼れぬことを知り、自分で解決せねばならぬと決心した。

金のことにに関して全く「けちで汚い」会社側には何の相談もせず、コイエッ

トはゼーランディア城の陸地側の外壁を更に強固にするための大補強工事に
取り掛かった。また、会社と取引する中国人のごまかしには鉄拳を持って臨
んだ。勿論、中国人を直接に取り扱ったのは彼の部下であった。信頼の置け
る中国人はゼーランディア城に住ませたが、中にはこちらの動きを敵さん
に知らせる悪名高きトラブルメーカーもいたし、噂を広める情報屋も密かに
混ざっていた。また、ゼーランディア城の背後には住み心地のよい村落がで
き、オランダの駐屯部隊の他に中国人も住んでいた。しかし、その近辺に住
む農民には米などの食料をゼーランディア城に運び込ませた上で、農家や農
地に火を点けて燃した。付近の中国人の家は全て破壊したか火を点けて燃し
上げた。と同時に彼らを他の地に追い出して移住させた。また、敵と連絡を
取る危険性から全ての漁船の出漁を禁止した。反抗する中国人は容赦なく処
刑した。ゼーランディア城の処刑所では連日、兵士が忙しく働いた。今まで
中国人に手出しをしなかったオランダ兵が中国人がゼーランディア城に近付
くと容赦なく殺害した。

このような非人道的な事態が、会社側に有利に跳ね返って来ることは、当
然ながら決してなかった。そして、総督や会社に対する中国人たちの態度が、
非常に敵対的に急変してきた。急いだ結果、ゼーランディア城の補強工事は
割に順調に進んだ。しかし、国姓爺の方もその情報を入手し、次の計略を立
てた。国姓爺の方の最大の問題は莫大な数の兵士たちの食料を戦闘中にも、
いかにして調達するかであった。台湾で（オランダ人が）田畑を焼いたとの
情報を入手した国姓爺は驚いた。食料のないところへ兵士は送り込めなかつ
たからである。兵士にとって食料は武器や弾薬よりも重要であった。空腹の
兵士に戦争はさせられないのである。そこで、国姓爺は台湾攻略を一時中止
せざるを得なかった。そして、兵糧米が積み込まれているコイエットとその
植民地を丸ごと取り上げる戦略に変えない限りは、こちらに利がないと彼は
読んだ。

数カ月後に情勢が明確に読み取れるようになった。今度は国姓爺が座り込
み、いつ敵を攻めるべきかを考えた。先ずその年の秋を考えた。台風が吹き
寄せる。気温も上がる。オランダ人は動き難い。こちらに利があると読んだ。

コイエットは付近の住民に命令を出すことは簡単にできたが、軍隊を動かすことはそう簡単にはできなかった。

バタヴィア城ではコイエットが住民に対して行った行動は承認したが、国姓爺が台湾に攻撃を掛けるという風説には耳を傾けず、嘲笑的な返事が届いた。

1660年4月22日付の会社参事会からの書簡にはこう書かれている。

「我々は先に国姓爺あてに書簡を送ったが、彼からの返信は何も入手はしていない。しかし、我々は最早、彼に対し何ら警戒をする必要は認めがたい。彼が軍団を率いて台湾を攻撃し、その征服を考えているという風説は風にたなびく煙のようなものである。彼に近付き彼の真の意向を伺ってみると、彼が本心から望んでいるものは我々との商業活動なのである。我々はタタール民族と対決状態にある国姓爺が（万が一にも）我々オランダ東インド会社と戦火を交えたとするならば、我々の攻撃力の下に彼らもいかに多くの損害を受けるであろう事か、また、それは彼の敵、タタール族をどれほど有利にすることであるか、少し考えただけでも想像がつくので、彼が我々との（友好を）望んでいることは容易に信じる事ができる。これもまた我がオランダ海軍の強大な軍事力のお陰であり、彼も我々の側にいるがために敵との対抗力があるのである。」

当時、バタヴィア城総督はニコラス・フェルブルフであった。彼はコイエットが台湾総督に着任するまでの前任者であった。1652年にタイワンで中国人の反乱が起きたが傭兵25名を連れて立ち向かい、オランダ側には何ら損害もなく、瞬く間に平定した経験もあり、台湾問題に関してはかなりの情報通として自負していた。フェルブルフによるとコイエットの意見というのは、まだ毛を刈るはさみが身元に置かれてもいないのに、毛を刈られたら大変だと言って朝から晩までメーメーとうるさく泣き喚く羊の声のようなものである。⁽²⁴⁾ また、現在の防御体制は国姓爺や中国人たちの軍事力より遙かに強固であり、彼らはそう簡単に手出しはできない状態である。だが、コイエット自身が女性的に弱腰になっており、また、武器も実戦では役立ちそうもない

ものばかりである。⁽²⁵⁾

コイエットはバタヴィア総督フェルブルフに書簡を度々送り、(ゼーランディア城砦は勿論、その城下にできた)都市を防備しなくてはならず、それは城壁を築いて防衛するのではなくて兵士によってのみ可能であると熱心に訴えたのだが、台湾事情に詳しい前任者でもあった彼には鼻歌ほどにも響かなかった。

1660年4月2日の日付の書簡によると；

「コイエット公爵殿⁽²⁶⁾は全く当方の許可も取ることもなく、御勝手に(ゼーランディア)城砦の東側入り口付近の低い防御壁の土台を更に補強したとのことであるが、このようなことが起こったこと自体、我々は信じ難い。我々はこの苦境の折から、このような難工事を完成することはできないし、また、その必要も認めない。それ故に我々の不満を喚起している。公爵殿においては、今後、いかに小さな事項においても注意深く事をお運びいただき、重要な事業に関しては、先ず当方の意向を傾聴し、形式的にも許可を取った後に敢行していただきたい。」

バタヴィアに在住した会社の役員会において最も重要なことは収入以上の支出を絶対に出さないということであった。また、収益を上げるということでもあった。しかし、コイエットは頑固な役員たちに内容が理解され、支援されるかどうかではなくて、自分たちの窮状を訴え続けた。

ちょうどその頃、ポルトガルが東洋に持っていた植民地の警備が手薄になってきたことがオランダ側に読み取れて来た。豊かなマカオが魅惑的な光を放ちつつ終焉に向かっていった。既にポルトガルの商人たちはこの地から巨億の富を自分たちの宝箱に十分に取り納めていた。ただ大胆で商売気のある司令官が連中の頭上に手をかざすだけでそこは手に入るのであった。もし、マカオをオランダ東インド会社が入手したとすると、東洋各地に散在しているオランダ植民地への関連基地がまた一つ増えることだし、その上、オランダ側が熱望していた中国本土との取引を開始する絶好の場所ともなった。

勿論、誰でも彼でもがそのような海賊的な夢物語を実践するわけには行か

なかったが、世の中には何でも手掛けてみようという男も、居る所には居るものである。そこでオランダ艦隊がマカオに向かうことになった。その途中にゼーランディア城外にも碇を下ろし、台湾地域の現状を探索調査し、コイエットの背中にもライ麦を数俵届け、元気付けてやれば大成功だと言うのである。

1660年7月16日、バタヴィアの会社役員会はこの計画をヤン・ファン・デル・ラーンに命令した。但し、彼には特に注意して、会社にとってはマカオとタイオワン両作戦とも、同等に重要なであることを強調した。そして、艦隊がゼーランディア地域に滞在する期間は、コイエット公爵殿下の指揮と命令の下に行動するようにと重ねて注意した。そして、これは会社の決議事項ではなくて、従うべき会社側の指導要項であると説明した。また、会社はコイエットに書簡を届け、会社が彼を助けるために人を動かし、物資を運ぶことがいかに費用のかさむことであるかを知らせ感謝させようとした。「何としても人手が不足しており、以前に（艦隊）派遣ができなかったことは遺憾に堪えない」という文で会社は自分たちの行動を弁解している。

同年10月6日、コイエットはゼーランディア城内の会議室に（台湾の）評議會を召集した。というのは艦隊指令デル・ラーンが2週間、ゼーランディア城外に停泊し、台湾情勢を観察した結論を出して、次の命令に従い、次の行動を取ると言ってきたからである。

「何しろ、ここの皆様ときたら、昼の日中から人魚や幽霊を見て暮らしているのだからね！」と大声で一同を嘲笑っていた。この「つむじ曲がりのヤン」氏にとっては、当然ながら台湾情勢は何ら恐れるに足らずであった。「国姓爺と彼の犬ころども」⁽²⁷⁾などは勇敢なオランダ艦隊の戦闘の相手には見えなかった。また、実際に中国側を調べてみると、戦闘準備や攻略計画など全然なかったと言うのである。また、台湾の中国人たちも平静な生活を送っており、司令官デル・ラーンとオランダ艦隊が台湾海域に停泊警備する必要も意味も全然ないと言うのである。

つまり、司令官デル・ラーンは総督コイエットから碇を上げる許可を頂き、マカオ急襲の作戦行動に一刻も早く移りたかったのである。

マカオには勇敢な海戦の武将が飛び付きたがる美味しい餌があった。また、会社もマカオの富を入手すれば艦隊派遣の膨大な諸費用も、台湾停泊の余剰な支出も、補って余りある収益が見込まれた。最後に司令官デル・ラーンはバタヴィアに在住する会社の重役連中が例え熱い火蓋を飛ばしても、ポルトガルの植民地を奪略することを非常に熱望していることに我が意を得ていた。

コイエットは司令官デル・ラーンに対して大論戦を繰り返して対抗した。まず、最近、実際に起こった出来事や事件を詳細に調べ上げ、国姓爺が遅かれ早かれ、必ずや台湾攻撃を実行することを警告した。また、オランダ艦隊がタイオワンを離れたことは、直ちにアモイに通告され、(国姓爺は台湾)攻撃の準備を直ちに再開するであろうし、もう直ぐに台風の季節となるが、それすら彼らには有利に働くのだと話した。

口からは(コイエットを)ののしる言葉を吐きながら、いかめしい顔つきで司令官ファン・デル・ラーンは護衛兵の前を通り過ぎた。が、護衛兵は銃を「捧げ筒」の姿勢に取って敬礼はしなかった。彼は旗艦「ドルフィン」に乗り込み、自分の部屋に閉じこもると思われたが、そうはしなかった。その代わりに、ゼーランディア城に入り、オランダ人の間を歩き回った。そして、その話題(国姓爺の台湾攻略)についての自説を説いて回った。そして、(お前たちゃあと言って)皆の者を槍玉に挙げ、その内にその中心人物なるコイエットを嫉み、誹謗した。オランダ人たちは「つむじ曲がりのヤン」が自説に基づきコイエットをやつけている言動を漫才士の語りを聞くように楽しんだ。

その14日後に、今度は司令官ファン・デル・ラーンが城壁に人々を集めて会議を開いた。事もあろうに、同じ場所にコイエットも親しい側近の者を数名集めて評議會を開いた。この際にもコイエットは更に詳しい事実を提示した。国姓爺が最近、中国人のジャンクを数隻拿捕しアモイに連行し、彼の船団に編入して運送能力を補強したというのである。また、ペスカドール諸島(澎湖島)付近に国姓爺の軍船が現れ、会社の船2隻を拿捕したという報告があったことも伝えた。これらの事実からして、近々、国姓爺が台湾を攻撃す

ることは誰しも疑えないという結論を出した。

司令官デル・ランは決して彼のあだ名を無駄にはしなかった。彼は何かを言い出したら決して自説を曲げたりはしない男である。そこでコイエットに仕える副司令官トーマス・ベーデル海軍大尉がやって来てある解決案を提出した。それはこちらの代表をアモイにいる国姓爺のところに送り、彼と直接に会見し、彼の本心を伺うというのである。この案はコイエットにもデル・ランにも聞き入れられた。

その年の10月の最後の日にデル・ランの艦隊所属の3隻の帆船をアモイに向けて出発させ、10日後に到着した。最年長の船長が国姓爺に書簡を手渡した。その書簡には（台湾攻撃に関する）彼の意向の返答、また、（オランダ東インド）会社に関して苦情があれば申し出ること、また、会社と貿易を開始する意向があるかなどを質問していた。

そこに派遣されたオランダ海軍には返事を10日以内に受け取り、帰航せよとの命令が下りていた。しかし、知的なアモイの支配者（国姓爺）は「（相手と）手を切るには時間を掛けてした方が良い」（＝せいては事を仕損じる）ことを知っていた。そこで、先ず20日後にオランダ側の代弁者の出頭を命じた。そして、一通の書簡が手渡された。その宛て先はコイエット自身への「親展」とされ中国語で書かれていた。

「本書簡は中国沿岸地区の総統である国姓爺が台湾総督コイエットへ送る。余と貴公爵殿下とは大いに隔たりがあるが、余は急処、余の注目と同情を蘭国へ向けて送る次第である。余は貴殿よりの書簡を礼儀と忠節を尽くして受理した。余は貴殿の書簡を注意深く拝読し内容を熟考したが、貴殿が非常に重要な情報の多くを間違っ受けておられることを理解したので、それらを真実なものへと正しておいた。」

続いて国姓爺は父一官と同様に、オランダ人とはできるだけ良い友好関係を持続することを絶えず努力していることを述べた。

「公爵殿下におかれましては、いみじくも余がオランダ国に対して尽くしてきた誠意ある感情を疑いまどうようなことはお控え下さい。万が一に

も余が公爵殿下の国に対して敵対する行為を企てるなどと想像なさらぬように。それらは全て悪事を企む悪しき人間の邪推によるものである。

余、自身は長年にわたり余の支配していた地方と地域を征服した満州タートル族との戦いに従事している。この行為は余に多くの負担を強いている。草が生えている以外に何も無い小さな地域の台湾に戦争を企てること以外に余には事実、他に何もなすことがないとでもお考えなのだろうか。

また、余が戦争の準備をし、戦闘開始の時間が近付くなら、余は事前に『東方に攻める』という噂を流すことにし、実際には『西方の攻め』を決定したのである。そもそも余が他の誰にも明かしておらぬ余の胸中の意向など、いかにして（他人が）想像し、感知できるものであろうか。公爵殿下はありとあらゆる他人の風説に耳を傾けられ、その全てを鵜呑みにされて信頼されたのではなかろうか。

インディク統治第 14 年第 10 月第 19 日。』⁽²⁸⁾

国姓爺は自分の平和志向を強調するために中国商人のジャンクを数隻ゼーランディア城へ向けてきたが、コイエットと評議会の者たちは巧みに偽装された一書簡などに騙される輩（やから）たちではなかった。実は国姓爺の事情が非常に困窮しており、できるだけ早く食料調達の基地を確保せねばならぬことが避けるべからざる火急の必要事であることが彼ら（コイエットたち）には明確に解っていた。満州族が中国大陆を陸海両面から攻撃し、南京を壊滅させ、国姓爺側を決定的な敗北に追いやり、中国大陆の大部分から締め出されていることも解っていた。国姓爺の平和宣言も実際には何の意味もないとコイエットは見ていた。彼はあの書簡に自分の計略は何ひとつ具体的には書いていない。注意して読むと、他人の胸中はいかにしても計り知れないと宣言しただけである。

その代わりにコイエットはゼーランディア城の外壁を補強することに急いで取り掛かった。地震、台風、水害が毎年台湾を訪れたため、大掛かりな補強工事が必要になっていた。1660 年の初冬に平常以上に丁寧な工事が行われた。コイエットは、オランダ人の誰の目にも明白に解るように、経済よりも

安全を第一とする政策に切り替えた。

更にゼーランディア城が襲撃に持ち堪えるように次の補強工事を行った。そして、評議会、長老会などの会議を1661年以降は無期限に無開催とし、物事の決定は総督自身が行うことにした。また、城外に在住する中国人の村民たちにも持ち物や財産をゼーランディア城または他の指定する場所に移し、オランダ人の監視下に置くように命令した。そして、台湾から穀物の積み出しを極力、抑えた。それは国姓爺側の手に収まり、兵糧として備蓄されないためであった。また、ゼーランディア城の砲台から時々、砲弾を放ち、銃や小銃も撃たせて兵士の訓練も行った。日夜の衛兵の数を倍に増やして強固にした。契約切れで兵役を終えてバタヴィアに帰る船待ちの傭兵も再びゼーランディア城に連れ戻し、採用した。

遂にコイエットは評議会を召集し、艦隊がマカオ攻略に向かうことに賛成か反対かの表決をはかった。評議会の大半は総督の現状判断を理解し、彼の意見に同意した。つまり、デル・ラーンとオランダ艦隊はゼーランディア城外に停泊しろということを決定した。

「つむじ曲がりのヤン」氏は評議会で「負け犬」となったがために、自制心までも失ってしまった。そして、コイエットと彼の評議会に対する尊敬も畏敬の念も捨ててしまった。そして、暴言を吐いてしまった。「スウェーデン人（コイエット）は腰抜けの臆病ものであり、そこに集まる者たち（評議会）も土偶の坊たちであり、脳なしどもである。」と。そして、コイエットを脅し上げ、「お礼参り」は受けて貰いたいとタンカを切り、先ず、初めてゼーランディア城を訪れ城壁に向かった時、衛兵は歓迎の礼を尽くさなかったから始まった。続いて、その種（コイエットにとっては何ら重要でなく、省略して当然なもの）に対する抗議事項の記録が次々と提出された。それを、なりふり構わず怒り狂った海戦の武将は彼の相談役（艦隊の士官たち）を集めて読み上げた。

ファン・デル・ラーン司令官は大声を張り上げ、荒れ狂う嵐の如くに体軀を躍らせ、聴衆の面前で「現在のタイワン情勢」という大講演を語り上げた。司令官の説にも一理あり、事実もあった。実際にはタイワンに住んでいた住

民には大きな不安が走っていた。その原因は、自分は罪もない平和を愛する（つまり戦争を嫌う）子羊のような者であり、オランダ人を尊敬し高く評価し、自分は商売をして儲けることのみに専念しているという書簡を書いて送った国姓爺のせいではなかった。住民の不安の本当の原因は総督フレデリック・コイエットの統治法にあった。彼は住民に酷い弾圧を加えた。食料を徴発し、城に運ばせた。また、住民の武器や財産も勝手に取り上げていた。住民は国姓爺を嫌う必要がなかったが、長官コイエットは住民が力を持つことを極力押さえていた。

このような事件が発生した以上、誰が何を言おうが、やろうが、指令長官ファン・デル・ラーンと総督フレデリック・コイエット公爵とが心を合わせて会社のために大仕事をなしとげるなどということは絶対に駄目となった。「つむじ曲がり」のヤン・ファン・デル・ラーンは自分が（タイオワンに）釘付けにされていることに腹を立て、マカオに眠っている黄金を手に入れる夢を削がれることを心配した。遂に彼は誰も曲げることができない強硬な意志と間抜けな一本気を盾にして、スウェーデン人コイエットに切り掛かることにした。

タイオワンに在住していたオランダ商人の中でコイエットを好まぬ、いや敵愾心を燃やしていた男の一人にトーマス・バリイ氏が居た。それから数日後だが、彼が壮大豪華な祝宴を開いた。そしてそこにはデル・ラーン艦隊指令長官と彼の腹心の部下の士官たちとオランダ植民地（タイオワン）で働いている親しい（気の許せる）オランダ人たちを招いていた。また、例外的だが、身分の低いオランダ人たちも宴会の途中から招いておいた。

酒樽の栓が開き、酒が流れ、美味な食物が喉を通り、参列者達が飽飲飽食し飽腹の極みに達した時に陰謀劇の幕が開いた。直ちに語るは語る、不満と不平が山ずみされた。そして、この男の意気と威勢を無にすることなきように全員が署名をして抗議文をバタヴィア総督に送ることを決議して祝宴の熱は燃えたぎった。

その抗議文の中味は、フレデリック・コイエットと彼の政策に対する不平と不満があった。彼は任務を遂行していないという趣旨であった。

「スウェーデン人コイエットは任務を遂行できる程に成長していない。彼は臆病者で国姓爺のことで脳味噌がいわれている。ご当人はタイオワンに対し、また、会社に対し、何ら敵対的な考えや行動は示していないのである。コイエットの恐怖心がタイオワン在住の中国人たちにもとんだ災難を降り掛けている。コイエットは何ら彼らを労ることなく、虐めている。会社が直ちにフレデリック・コイエットを現職から解任し、追放するならば、会社と当タイオワンには良いことばかりがあり続けるであろう。彼の能力と才能の欠乏が中国人との取引のみか、多くのオランダ人の取引にも不確実で不安定な結果を招いている。」

当時の当地の風習によると、酒が回って前後不覚となった人間は食卓の下にもぐり込むことになっていた。ところで、その夜の大半の客人は、これから本番の時となってみると、食卓の下に潜っていた。果たして、客人たちは立ちあがり、しっかりとガチョウの羽でできたぺんを持ち、インクを付けて、署名ができるのかという問題が出て来た。何しろ客人の大半がバリイ氏のご招待に前後不覚に酔い崩れていたからであった。そこで署名は翌日へ延期しようということが決まった。

ところが日付が翌日が変わってしまうと、前夜は魔水を飲んで夜の英雄となった人間の様態も太陽が輝き、魔水の威力も消えてしまうと、全く変わって来てしまった。つまり、そう簡単に抗議文に署名など書けなくなって来ていた。勿論、ファン・デル・ラーンの気持ちだけは、前日と変わる筈はなかった。そこで彼はきびすを返し、部下の中で最たる不平不満男と人生の出世のみを熱望するゴマスリ男の所に行き、コイエットに関する不平不満と彼の罷免を願う嘆願文を書けと命令した。（そして、彼は全艦隊の大部分を率いてマカオに向かった。）その時、ゼーランディア城に残され、停泊していた艦船といえば大型ハヤト船「ヘクトル」、「スホーラフェランデ」、木造船「フィンク」、連絡用小型ハヤト（ヨット）船「マリア」の4隻のみであった。

さて、バタヴィアに帰着するや否や、艦隊司令官ヤン・ファン・デル・ラーンは荒れ狂った嵐のように、また、突然に爆発した南海火山の噴火のように、

城内に荒波を立てた。先ず、集まった東インド地域総領事と評議委員会の前で感情を十分に盛り込んだ大演説を吼えるようにして訴え語った。先鋒はフレデリック・コイエットであった。彼がいかに臆病者であるか、(現地人を弾圧殺害などした) 残忍極まりない極悪人であるか、そのくせ、何もできない無能な男であるか、余すことなく事、細々と演説調で説明した。怒鳴り声は更に続いて、バリイ氏開催の宴会にて、署名入りの極秘の私信を託されたと言って、それを朗読した。それに加えてもう一つの抗議文が届いていた。それは通訳のピンクワ(何廷斌)からであった。彼のことを御存知だろうか。1624年、オランダ人が歴史上に初めて台湾島のタイオワンの砂浜に足跡を付けたその時からオランダ人に親しみ、歴代の台湾総督の現地通訳を勤めたオランダ人から最も信頼された中国人であったが、ある宴会の最中に国姓爺の使者に誘拐され拉致されてアモイに連れて行かれた男であった。彼の誘拐事件は多分、コイエットに良い印象(好都合)を与えたのであろう。彼はスウェーデン人コイエットと共に公私共に貿易業を営み、出入りする商品に課税して懐を肥やしていたのだが、相手を居眠りばかりしているパートナーと考えていたのであろうか。それで国姓爺の部下の中国人サンガエ(三官?)と共に彼の誘拐事件を工作したのであろうか。どうして他人がコイエットの内心まで理解できたのであろうか。双眼鏡を手にして憎しみの湖に潜ったデル・ラーンは湖底の水こけを発見したようなものであった。

ニコラス・フェルブルフはいちいち大きくなずいた。この海戦の武将とか呼ばれる海熊の吼えるような声で語る台湾の現状報告なるものの一点、一項ごとに、彼が以前から考えていたことに当てはまった。国姓爺からの報告には何ら危険も疑惑も感じなかったが、その代わりにコイエットからの報告には長屋の女将さんたちの立ち話のようなものにも危険を感じているようであった。コイエットの意識は恐怖心に覆われており、寛大な性格のフェルブルフから見ると論外であり、真実性に欠けると思われた。そして、コイエットは臆病であり、悪者であり、無能であることがうなずけた。そうなれば早速にも彼を首にした方が良いという考えに変わった。しかし、台湾情勢に詳しいと自負し、権威を重んずるフェルブルフは同時にデル・ラーンを呼び出

し、彼の解任も要望することにした。

全く不思議なことだが、いろいろな苦情を評議会に掛ける準備もしていないのに、バタヴィア総督会議と評議会はフレデリック・コイエットを直ちに解任した。そして、1661年6月21日、(インド)参事会及び評議会はヘルマン・クレンク・ファン・オデッセンを新台湾長官に任命した。

クレンクは法学者である。バタヴィア最高裁判所の法律委員を勤めていた。彼が選ばれたのはデル・ラーンとフェルブルフの台湾情勢の意見が議会を動かしたからである。国姓爺は決して危険な存在ではない。彼は現状を保持し、水軍、陸軍の資金獲得を企んでいるのみである。台湾長官が疑うような台湾への軍事攻略は考えられないというのである。そして、法律の専門化を台湾へ送り込み、法整備と権利を明確化する必要があるという考えが根底にあった。そして、現地在住の中国人に過酷な要求や強制的な労働や奉仕を押しつけてはならないという配慮もあった。

クレンクは直ちにゼーランディア城に向けて出帆した。会社側の決議に基づきフレデリック・コイエットに決議文を手渡し、彼の後任となるためであった。

その決議文には：

「昨年公爵コイエット殿への書簡で明らかにしたように、会社側はマカオに眠るポルトガル植民地を戦艦と戦人との力を借りて入手することを切望していた。かの地において我々はかなりの大勝利を目算していた。ところが、我々が大いに驚いたことに、このように充分に趣旨を説明したのにも関わらず、会社側は心身降り注いで計略を練ってきたのであるが、公爵殿はその計画を疎外し、中止させられた。……」などと書かれてあった。

そして、参事会は、コイエットが大した理由もないのに国姓爺への恐怖心から、ファン・デル・ラーンと彼の艦隊をゼーランディア城に釘付けにしておき、マカオ略奪計画を台無しにしてしまったことを認めたのであった。

「そのために、公爵殿が何をするにも恐れおののき、貴殿の地位にある人物が当然に持つべき勇気を消沈させていたことを会社側は認めざるを得な

いのである。」

更に、続いて、コイエットはパニック状態に陥っていた。また、中国系住民に何ら取り上げるべき理由もなく国姓爺に内通していると決め付け、暴力を用いて酷い取り扱いと弾圧を行ったとした。参事会は可哀相な中国人たちに、身分の上下を問わず、心からお詫びをせねばならない。コイエットは彼らを苦痛、むち打ち、投獄、家財（穀物）搜索と取り上げなどで虐待したのであるから。

「哀れにも連中の大半は国姓爺（の台湾攻略）に関して何も知らないし、または、知っていたとしても、作戦上に重要なことではない。また、苦痛を伴う尋問で何かを吐いたとしても、大した事ではない。」

ファン・デル・ラーンはコイエットの罪状の総目録を作っていた。それによると、：—

彼、コイエットは中国人の手を縛り、倉庫に閉じ込め、蓄えていた米と共に焼き殺した。

彼、コイエットは彼ら中国人たちを家の庭から、働いていた畑から引きずり出して地を這わせて移動させた。

彼、コイエットは何の罪もない漁民たちがその豊かな収穫を陸揚げすることを禁止し、それらを海に捨てさせた。

彼、コイエットは彼ら中国人農民の家の窓も戸も釘付けし、哀れにも住民を（会社の）傭兵を用いて強制収容所へ連行させた。

「……このような事を実行したのは決して正当な理由がある事実に基づいて行ったのではなかった。」等々と、哀れな台湾在住の中国人に深い同情を持って参事会は決議書を書いた。しかし、ファン・デル・ラーンによって同様な、また、それ以上に過酷な仕打ちを受けたマカオの中国人に関してバタヴィアの参事会に列席なさった紳士たちは何も書いていなかった。そして、参事会はコイエットを恥知らず、独裁者、冷酷な鬼と評価していた。彼の前任者フェルブルフは賢くもあり、勇気もある人物であった。事を成すと決め

ると何にも怖じず、徹底的に成し遂げる男であった。首のすげ替えはコイエット一人だけではなかった。彼を補佐してきた者（評議員）たちも解任することにした。書簡には次の様に書かれている。

「先ずは、フレデリック・コイエットは会社が周到に用意し、十分に考慮して立案した命令に対して何ら従うこともなく、サボタージュ（営業妨害）を成していたことが明白に判明した。それにより、我々、会社側は多大の損害と侮辱を受けていた。コイエットは度々、会社側の意向を無視して物事を決議したので、我々はその処置に関し十分に考慮し、熟議し、全般的に見て最善の方法を決定した。

我々は（ここに）長官、及び、彼に奉職した次席官、同様に、第三席官（代官）を解任する。フレデリック・コイエット長官は直ちに役職から身を引くことを命令する。今後、いかなる事があっても台湾の行政に関し、一指なりとも触れる事を固く禁じる。

台湾長官の役職は前インド政庁経理弁護士、ヘルマン・クレンク・ファン・オデッセン公爵に委任される。彼は（彼の）辞令を持って、この船により旅立ち、台湾に向かい、植民地ゼーランディア城の指揮を執ることにしている。コイエット氏、評議員ヤン・ウーチェスとヤコブス・ファレントラインは直ちに役職から身を引き、先ず、官舎を引き払い、家族を連れてこちら（バタヴィア）へ戻ってくることに、また、引越しの費用の請求書を当方へ提出する事を命令する。」

同年の6月30日、新長官を乗せた船が台湾の島影を認めた。クレンクは早朝に目覚めた。新調した長官の礼服に身を固め、室のいすに座り、船の到着を待っていた。そして、心の中では自分に礼砲が撃たれ、旗がたなびく中を、法律家であり正義の公僕として、さっそうとして新任の植民地に足を踏み入れる光景を想像し、期待していた。そして、着任後は速やかに、国姓爺を恐れおののき、自ら独裁者となってしまったコイエットに代わり、正義が守られる法律の設定を急がなければならないなどとも考えていた。

霧の合間にゼーランディア城が見えるまでに船が近付いた。しかし、奇妙

なことに、城壁からは稲妻が飛んでいた。何か異様な光景が目撃され、何かの異変が感じられた。きっとゼーランディア城に熱帯特有の雷雨が降っているとも考えられた。

しかし、ヘルマン・クレンクが待望のゼーランディア城に近付けば近付くほど、彼の顔の表情が極悪に変化して来た。船が停止した。それは権威ある長官が、また、軍人が停船を命令したのではなかった。砲の撃ち合いが展開していたので、(船長は停船せざるを得なくなったからである。) 数百隻の中国人のジャンクがゼーランディア城と(その前線基地の)プロヴィンシア城砦の間の海上に並び浮いていた。クレンクが双眼鏡を取り出し城砦を見てみると激しく降り注ぐモンスーン(台風)雨の中に大きな旗がひらめいていたが、その旗は血で赤く染まっていた。つまり、城砦では生死を決める激戦が攻撃をして来た敵に向かって展開されていることが手に取るように解った。⁽²⁹⁾

このような歓迎式典が催されるとはクレンクは夢にも思っていなかった。一度舌打ちをした彼は即座に決心した。自分は決してこの戦争に関わらない。また、この地に降りて長官とかいう職を身に受けてはならないと。彼は狐につままれた思いだった。畜生！人を騙しやがって、何が長官だ、そんなものをお受けする義務など、こちとらさまには全くございませんよと独語した。と言うのも、彼がバタヴィア出発前に受けたお達しというのは、コイエットという男が台湾をむちゃくちゃにしまったので、君が当地に行き、秩序を回復してくれれば、それで十分だという説明だけであつた。クレンクは水兵に命令し、救命ボートを海面に下ろし、更に、ゼーランディア城に向かい、会社がコイエットと他の二人の評議会委員に宛てた書簡を届けろと命令した。

何はともあれ、クレンクは急いでいた。そのため、救命ボートが(任務を遂行して)帰還するのも待てなかった。彼は船長に直ちに船を移動させろと命令した。行き先はと船長が聞き質すと、それはバタヴィアではなかった。そこへ行くなら、実はコイエットは正しかったですよ、直ぐに救援隊を送って下さいと言わなければならなかった。そこで、行く先は日本の長崎の先の

「デジマ」だと叫んだ。

船が進路を北東に取って数日間進んでいると、遠くに中国商人のジャンクが目撃された。クレンクは早速にそのジャンクを停止させ、積み荷を没収し、オランダ船に積み込ませた上に、中国人の船員たちを無人島に連れて行き、水も食料も与えずに上陸させた。幸い数日後、中国人の漁船が近くを通り掛かり、彼らを救助したのだが、クレンクは海軍勤務の経験があり、そのジャンクの中国人船長はオランダ東インド会社が発行したオランダ語の貿易証書を持っていたにも関わらず、水兵にジャンクを焼き払うことを命令した。

***（つづく）

訳者の脚注と解説

- (1) オランダ東インド会社で当時（1650-60）、東洋貿易は東インド総督に牛耳られており、各地に点在した商館の人事もインド総督府とインド参事会が最終的には決定していたようである。著者は「役員会」としているが「参事会」が正しいと思う。
- (2) 当時の商館の商務員の構成は下から：補助（商務）員 Assistant、商務員補 Ondercoopman、商務員 Coopman、上席商務員 Oppercoopman へと進み、その内、多年間精勤に勤務し、業績を上げた商務員がインド総督府の参事会に推薦され、商館長 Opperhoofd、更に長官、知事、総督へと任命された。コイエットはまさしくそのような出世街道を歩んだ男だった。人名や地名は、誤解と混同を避けるために、全て先人の訳を踏襲した。
- (3) 当時、オランダ人が植民地化に成功したのは台湾の西南部、現在の台南県の安平付近の一点の砂州の上に築かれたゼーランディア城とそのやや北方の赤崁（サッカム）のプロヴィンシア城だけであった。本当に大きな島の一点一角だけであった。しかし、歴史的には非常に大きなものを残している。
- (4) ニールス・マットソン・シェーピングは1680年にストックホルムで死亡、彼の墓はストックホルムの中央駅近くのクララ教会に現存する。
- (5) ポルトガル人の台湾島発見は種子島発見の翌年の1544年であった。船員たちが「美しい島！」Ila Formosa! と叫んだので「フォルモーサ」と呼ばれ始めたと言われている。オランダ人は1624年8月26日に前記の安平に初めて上陸している。オランダ人

は最初は台湾島全体を「タイオワン」と訛って呼び出したのだが、その内に台湾島内オランダ植民地のある安平（ゼーランディア城）と赤崁（プロヴィンシア城）の近辺のみを「タイオワン」と呼びだした。実は日本人の海賊船「倭寇」はその頃、盛んに台湾を荒らしていたらしい。日本の統一を成し遂げた豊臣秀吉が原田孫七郎という人物を1593年に台湾山地にまで送り、原住民の「高砂族」に入貢せよと命令をしていたが、実現はしなかった。当時の中国の明王朝は台湾には無関心だったようで、その後、清王朝になり、台湾島外、遙かに離れた澎湖列島の警備のために「巡檢司」を送っただけであった。

- (6) ホー・ピンクワ（何廷斌）。名前の表記も多種多様で、斌官、斌歌などもあり、伝説化された人物であり、真相は今後の発掘を待ちたい。（中村隆志氏の考証によると）楊英著『從征実録』からの引用として、泉州安南の出身とされている。オランダの会社がタイオワンに橋頭堡を築いたその日から通訳として勤務しているが、元々は赤崁のカベサ、つまり、（密）貿易を仕切っていた領袖、頭人、首領であつたらしい。また、その貿易業も当時一般的であつたように家族の組仲間であり、妻の父（同じく広東人）と組んで東南アジアを拠点として貿易を営み財を成したらしい。彼の父キムチン Kimtingh（漢字名は不明）が1648年7月21日、赤崁で死んだので、当時の風習により父の職業を後継したのであろう。彼の父は赤崁に在住した八華僑団の長も歴任し、村落の調達の請負人もしており、トンキンからカンボジア方面まで手を広げて（貿易）商売をしていたらしい。その後、ピンクワ自身も益々手を伸ばし、1650年にはバタヴィア、51年にはマニラ、53年にはトンキン、日本（長崎）、55年にはカンボジア方面に毎年、貿易船を出していたらしい。また、台湾（赤崁？）では中国人領袖 Chinese cabessa として、米作10分の1税をはじめ、重量税（物品税）等の収税取り立て請負人としてオランダの会社に勤務していた。当時、会社からの信頼は絶大であつて、1657年の夏、（本稿にも登場する通り）会社から依頼され国姓爺（鄭成功）の居城に派遣され、貿易禁止令の撤廃の交渉に当たり、それを成功させて夏過ぎの8月に帰宅した。ところが1659年に会社側から取り立てた税金を横領したとして告訴され、会社を解雇された。また、彼が台湾で持っていた全ての権利や特権も剥奪された。また、会社は罰金刑に処した。立腹した彼は1660年、中国へ行き国姓爺に台湾は肥沃豊作の土地であり、兵糧米が山積みされていることを力説し、また、オランダ側の防御の手薄なことを教え、彼に台湾攻略を決意させた。そして、戦闘が開始された時には自ら軍船を水先案内して渡来した。しかし、その後、国姓爺との関係は悪化し、彼は再び失脚し、台湾の地（台南県車路乾脚）で不遇の死を遂げたとされている。

また、『ゼーランディア城日誌』からとして、1661年9月3日の項には、ピンクワが国姓爺から悪意と疑惑を受けないために、彼の目を逃れて戸内に20日間以上も閉じこもっていると書かれている。10月18日の項にも、ピンクワは中国で広言したため国姓

爺の耳目を避けて赤崁の薬屋にひそかに蟄居していると書かれている。翌1661年1月2日と24日の項には、国姓爺はピンクワを軽蔑し、もう会わぬと言ったと伝えられたとある。また、1月28日の項には、中国人捕虜から得た情報として、中国在住の国姓爺の息子（鄭經か？）がなぜ中国に帰還しないのかと父親に質問状を出した。すると、父親は、吾はピンクワの欺瞞に掛かり、台湾に渡来したことが恥ずかしくて帰国ができないと返事したそうであると書かれている。それは国姓爺が大軍を率いて台湾攻略を行ってみると、防御が脆弱と言われていたゼーランディア城は中々に落ちず、その上、台湾には予想していた量の食料もなく、台湾攻略は失敗であったと（国姓爺に）考えられていると（会社側には）思われた。また、1月28日の項には、彼は第2漁場のテントで密かに暮らしているとの伝え聞きを記しているが、それが彼の名が登場する最後であると言われている。

- (7) 原語は「知事」である。先人の労を踏襲して爾後も「長官」とする。
- (8) 著者は何を根拠に、また、いかなる部族を対象にこの判定をしたのかは不明だが、このような断定には極めて学術的な注意が必要である。（訳者）
- (9) 原語はヨーロッパ人に直ぐ解る旧約聖書民数記13:27などの聖句「乳と蜜のしたたる（神の約束の）地」である。
- (10) 著者は「役員会」という現代的な熟語を使っているが、当時、会社の議決機関としては「参事会」「評議会」と邦訳されている。
- (11) 当時、現代のようなバロメーター（気圧測定機具）が既に発明されていたのかは不明だが晴雨は航海に重要なので何らかのものが考えられる。問題はこれが著者ムレーンの比喩なのか、実際に、コイエットが書簡の中で用いた用語であったのか、訳者にはその判断は困難である。
- (12) ニコラス・フェルブルフは1649年から54年まで足掛け6年間も台湾長官を歴任した大の台湾通であった。その時の長官次席がフレデリック・コイエットであった。この両者はことごとく不和对立関係にあった。その後、フェルブルフはインド評議員となりコイエットの上役となり、彼の書簡を受け取り、眼にしても、彼を臆病者として嘲笑うだけであった。その彼に台湾情勢の実情を焼きつけた事件がFayet 郭懷一の反乱であった。

本誌（第6号18ページ以下参照）の1653年8月7日の長崎商館日誌にコイエット自身がフェルブルフからの書簡として記録している。

（中村孝志氏の考証によると）この事件は1652年9月7日の夜、プロヴィンシア城砦近辺の赤崁の農民領袖 Gouquan Fayet 五官郭懷一の許に中国人4~5,000人が蜂起し、近隣の民家を焼き、略奪を行い、オランダ人を8名、黒人奴隷を数名殺害した事件であった。フェルブルフは早速、婦女子や子供をゼーランディア城内に移し、下士官アールドルブに約150名の小銃隊と約1,000人の住民兵を与え赤崁に送り平定さ

せた。結果的にはオランダ側の犠牲は少なく、12日間で平定された。首領の郭懷一は戦死したが、反乱分子約4,000人の中国人がオランダ側に処刑された。10月2日にゼーランディア城内の教会で戦勝感謝祈禱礼拝が挙行されてこの事件は処置された。このような事件から推してフェルブルフたちの頭の中には、中国人の反乱や攻略など世界第一のオランダ海軍の前には物の数ではないという先入観が強かった。それにコイエットの個性に好意点を見出せなかったフェルブルフにはコイエットの警告も「負け犬の遠吠え」としか聞こえなかった。

- (13) 罪も穢れもない子羊であるイエス・キリストが全人類の罪を背負ってほふり場に連れて行かれて殺される福音書の記事から、日本語の「他人の濡れ衣を着せられる」「身に覚えのない罪を着せられる」に相当する語句。
- (14) 日本語では「金持ち喧嘩せず」の語句が相当か。
- (15) 彼の名前の表記は中国式、オランダ式などかなり多様である。本書の原著者は「ピンカ」Pinqua、または「ホー・ピン」Ho Pinを混用しているが、どちらも同一人物である。日本では村上直次郎博士の訳「ホー・ピンクワ」Ho Pinqua (何廷斌)が定着しているので、本稿もそれに従う。
- (16) 村上直次郎著『バタヴィア城日誌』3巻 p. 160によると、コイエットがタイオワンに到着したのは1657年6月15日で、月給は200グルデンであった。
- (17) この項を裏付ける記事は村上(前掲書：3巻、p. 192)、1661年3月22日の記事に；——フォルモサにおいては何事もなかりしが、前記長官(コイエット)および評議会は司令官デル・ラーンおよび次席商務官ケイゼル Jakob Keyser の意見に反し、右艦隊を1661年の2、3月まで澎湖島に留め、しかる後マカオに派遣すべく、その間に中国の国姓爺の許に特使を派遣し、彼が欲するのは平和なるか、または戦争なるかを明らかにすることを可決し、この決議に従い少尉オイラーツ Oillarts は艦隊のうち三隻を率いて中国に向かいしが、国姓爺より歓待を受け長官コイエット宛の書簡を得て帰り来り。これによりて国姓爺は平和を希望し少しも戦争を望まず、長官(コイエット)が何故にかくのごとき噂を信ぜしか不思議となしたり——。この記事によるとピンクワの派遣は何も記されていない。

管見であるが、著者ムレーンはその以前の事項と混同されたのではないかと案じる。史実が伝えるところによると、日蘭貿易時代(それは東インド会社の独占事業であったが)に例外的に中国は日本との貿易を許されていた。その中国で日本貿易をやや独占的に行い巨額の富を得ていた男が日本では一官の名前で多くに親しまれていた鄭芝龍であり、その息子鄭成功こと国姓爺であった。彼も多くの日本人に親しまれ彼の人生は半伝説的となり、それを元に近松門左衛門の「国姓爺合戦」が歌舞伎で上演され、大成功を収めたことは第6号に解説したが、ところが鄭のジャンク船とオランダ船は次第に競争相手を意識しはじめ、海上でも戦火を交えはじめたため、国姓爺は中国台

湾間貿易禁止令（発令の詳細は不明だが1655年と考証される）を發布した。そして、その通達書簡が1655年9月19日にピンクワに託された。彼は早速それをオランダ語に訳し会社側に伝えたが、会社側は事実無根として無視したため、台湾に商品が欠乏し、オランダ側は貿易ができなくなった。（1655年12月24日付の台湾から東インド総督宛の書簡などによる）更に国姓爺はマニラ貿易も（1656年6月27日付で）禁止した。結局、その貿易禁止令の撤回を促す書簡を東インド総督マートサイケルの名で（1657年6月16日付で）彼に送った。そして、その書簡は中国人甲必丹（カピタン）ビンガム Capt Bingam（幡明巖）と船頭（ナコダ）ジークワ Siqua（顔二官）であった。オランダは当時、東洋各地で生糸を集め、それを長崎で売り捌き、銀に替える三角貿易で暴利を得ていたが、オランダ船と中国船との食うか食われるかの海賊的海上トラブルは年々増え、両国の間には対立するのは当然であった。また、1652年に発生した郭懷一の赤嵌での反乱も、彼は以前には国姓爺の父、鄭芝龍の部下であったので、背後には国姓爺の手が働いたとコイエットは考えたのだが、彼からの書簡の文面を文字通りに信じた会社に対して実践派のコイエットは太刀打ちできなかった感じである。

- (18) 前出の中村氏の考証によると、コイエットは1660年10月31日の日付で台湾総督（長官）として国姓爺（鄭成功）宛てに書簡を送ったが、その特任者はオイラーツであり、ピンクワやサンゲ（サンクワの誤記か？）は出ていない。

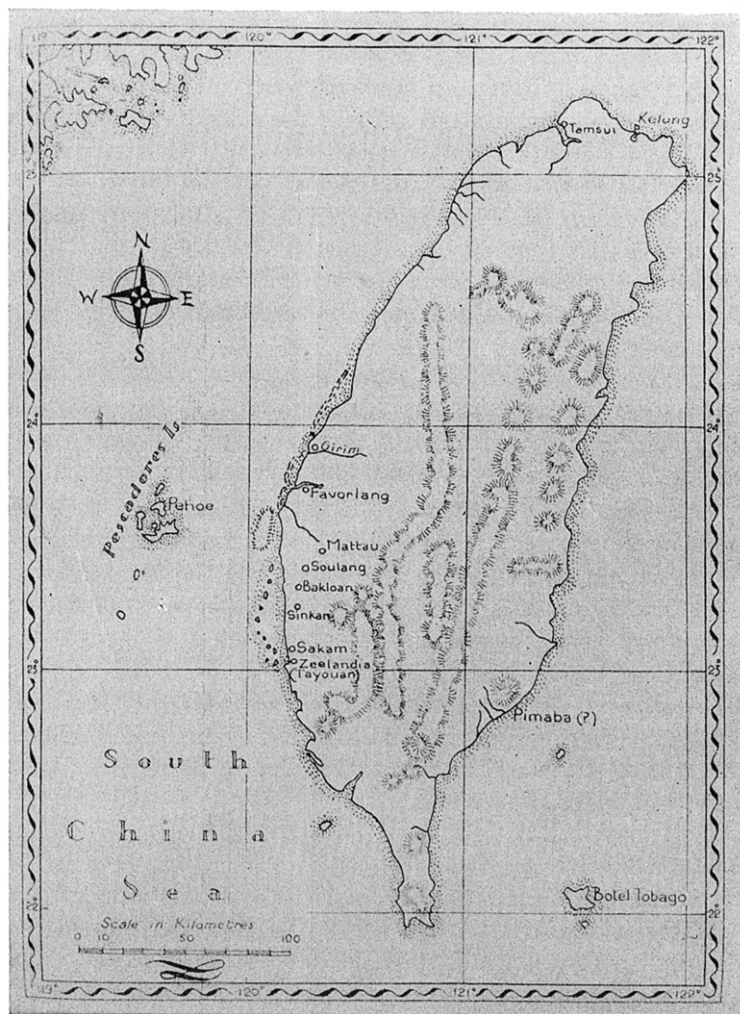
オイラーツたちはアモイ（厦門）で国姓爺に優遇され、彼は戦争を好まず、平和を望んでいる趣旨の返書（1660年11月21日の日付）を携えて帰国している。（村上、『バタヴィア城日記』3巻、p.198）その書簡が元でファン・ラーンは国姓爺の台湾攻撃説を否定し、マカオのポルトガル勢力を攻撃し、壊滅させようと計画しオランダ艦隊を率いて実行し、成果を挙げた。

著者ムレーンは国姓爺が1656年に当時の東インド総督府長官オランダ人ヨアン・マートサイケルに宛てた書簡とその返書（1657年6月16日の日付）を運んだ2人の中国人甲必丹（カピタン）ピンカム（潘明巖）とジークワ（顔二官）の名前を上げているものと考えられる。ピンカムはバタヴィア中国人第3代の甲必丹で1645年より63年死去するまで在任。ジークワは63年に第4代甲必丹にピンカムの後任に選ばれたが66年に死亡している。彼は1626年に中国からバタヴィアに渡り、貿易で大成功し、1643年に一般司法裁判所の法務委員にも選出されたバタヴィア在住華僑内の屈指の名士であった。（中村、前掲書、p.162 参照）著者ムレーンの挙げた「サンゲ」は不詳。

- (19) 著者ムレーンのこの奇妙な例話の意味は国姓爺の方は心理作戦として、事前に噂の火種を撒き、人心攪乱後に戦闘を開始すると大衆を味方にするのができて有利であるという意味であろうか。
- (20) 細かいことで恐縮だが、著者は最後のスペルを m と n を違えている。本稿は先人のわだちを踏襲する。

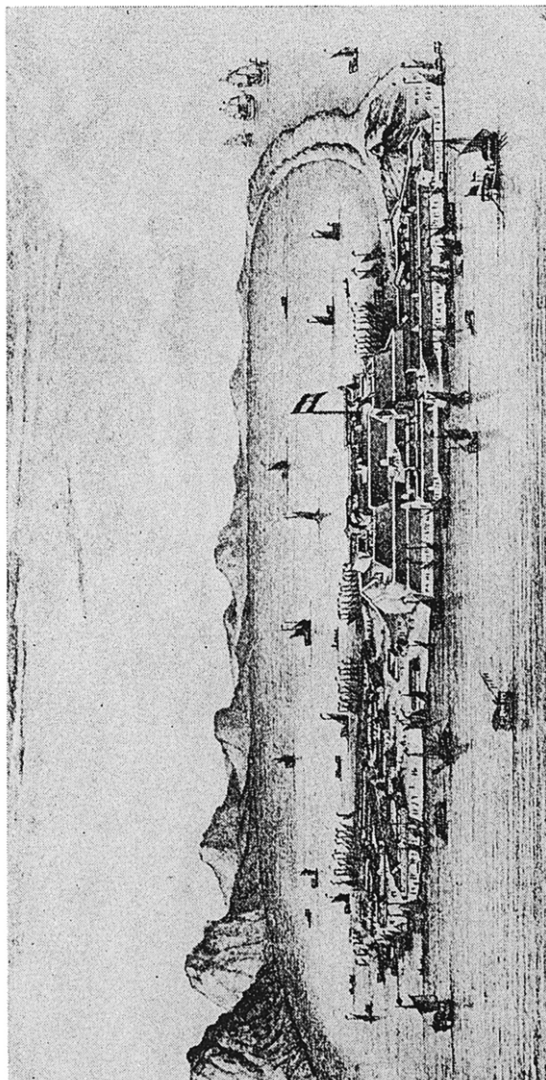
- (21) デル・ラーンのゼーランディア城到着は1660年9月20日である。(村上、前掲書、p.16、中村孝志の校注による。)
- (22) 実際に「親戚の者」に宛てたのか、「親しい者」に宛てたのか、著者の用語に疑問。
- (23) このような「噂話」などの資料の出典は不明である。
- (24) 羊は毛を切られて成長するので、「刃物を見てわめき散らす羊はいない」とする説である。欧米でよく使われる比喩である。しかし、「罪なく殺される羊」もいる。
- (25) コイエット自身、軍人ではなく、商務官上がりである点、彼の軍事的な意見は軍人や軍事専門家から嘲笑されたい。
- (26) コイエットは実兄のペーテル・ユリウス・コイエット（当時、スウェーデンの駐英大使）と共にスウェーデン王室から1649年11月20日に公爵の爵位を授与された。(第4章：第6号 p.7 参照)
- (27) 司令官デル・ラーンは国姓爺を絶えずこういうあだ名で呼んでいたらしい。
- (28) この書簡に麗々しく書かれた王名とその統治年代は国姓爺がアモイに引き籠ってからも考えられるが、やはり架空のものと考えられる。
- (29) 国姓爺こと鄭成功の軍が台湾攻撃を開始したのは、(前出、中村孝志の考証によると) 1661年4月30日払暁であった。皮肉にも新長官クレンクのタイオワン到着とほぼ同時刻であった。

(2002年4月1日 受理)



コイエット在住時代の台湾地図

(出典は不明、英語版なので後世の複製と思われる。)



極東にあるオランダ人植民地の前線基地となったゼーランディア城塞

(ハーグ国立文書館内の絵画からの複製)

(天理大学図書館所蔵の「閉塞された台湾」の口絵にも、これによく似たものがある。)